

稚児塚古墳

— 第 2 次 発 掘 調 査 報 告 —

1995年

立山町教育委員会

序

文化財は、祖先の営みを私たちに伝えてくれる語り部であり、過去だけではなく現在の文化を理解するためにも重要なものです。中でも、埋蔵文化財はその土地に深く関係しており、郷土をよりよく知るための鍵であると言えましょう。

このたび調査の行われた稚児塚古墳は、富山県内最大の円墳として著名であり、周濠など外部施設のそろった県内唯一の大型円墳としても広く知られていました。

また、地域住民からは地区の歴史の象徴として親しまれて、大切に保護されてきた古墳もあります。

昨年度に行った第一次調査で、周濠・葺石の存在が再確認され、墓道・石垣状遺構などが検出されたのに加え、今回の調査では、テラス部の葺石や、周濠の外を巡る周庭帯など、新たに貴重な遺構が検出されました。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

最後に、調査に際して御援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査に御協力いただいた地元や諸方の皆様に衷心より感謝申し上げます。

1995年3月

立山町教育委員会

教育長 金川正盛

例　　言

1. 本書は、平成6年度に国庫補助金及び県費補助金の交付を受けて実施した、富山県中新川郡立山町浦田に所在する稚児塚古墳の緊急発掘調査報告である。
2. 調査期間は、平成6年10月18日～11月29日までの延30日間である。発掘面積は約370m²である。
調査期間中は、地権者をはじめ地元の方々から多くの御協力を得た。記して謝意を表します。
3. 調査事務局は立山町教育委員会におき、社会教育課主事三鍋秀典が事務を担当、社会教育課長開上寛が統括した。
4. 調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事三鍋秀典、立山町教育委員会学芸員柴垣智子である。
5. 調査にあたり、富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センターから有益な御教示を得た。また、調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表します。
新潟大学教授甘粕健、大手前女子大学教授秋山進午、立命館大学教授和田晴吾、愛媛大学教授下條信行、福井県立若狭歴史民俗資料館副館長中司照世、富山県立上市高等学校教諭舟崎久雄、石川県立金沢松陵工業高等学校教諭河村好光、富山市教育委員会副主幹藤田富士夫、小矢部市教育委員会係長伊藤隆三、更埴市教育委員会矢島宏雄、北野博司、安英樹（以上石川県立埋蔵文化財センター）、上市町教育委員会主任高慶孝、福井市教育委員会主事坂靖志、天理参考館学芸員小田木治太郎、大阪府埋蔵文化財協会小田木富慈美
6. 遺物の注記は「TCZ」とし、次にグリッド名、層位、日付の順に付した。
7. 遺物整理・実測・製図は、三鍋・柴垣が中心となり、高橋浩二（大阪大学研究生）、鈴木和子・長谷川幸志（富山大学大学院生）、大野淳也・大泰司統・大平愛子・河合忍・武田昌明・野中由希子・福海貴子・石内詩保・内田亜紀子・坪田聰子・米出敬子・芳賀万里子・石井淳平・田中幸生・向井裕知・本村徹・工藤直子・三浦英俊（富山大学学生）が協力した。
8. 本書の編集・執筆は三鍋・柴垣・高橋・大平が担当した。執筆分担は各文末に記した。

目　　次

頁

I 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	1
1. 立山町の歴史及び地理的環境.....	1
2. 古墳の立地.....	1
II 調査に至る経緯.....	3
III 調査概要.....	4
1. 墳丘.....	4
a. 墳形と規模.....	4
b. 莢石.....	4
2. 周濠.....	4
3. 周庭帯.....	5
4. 中世墓.....	5
5. 潟（弥生）.....	5
6. 遺物.....	8
a. 土器.....	8
b. 石器.....	15

IV 調査成果	16
参考文献	17

挿図目次

頁

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 地形と区割図	折込み
第3図 第2区全体図	折込み
第4図 第3・4区全体図	折込み
第5図 墳丘葺石実測図 (1) 第2区 (2) 第3区	折込み
第6図 中世墓実測図	6
第7図 墳丘斜面模式図	7
第8図 遺物実測図	8
第9図 遺物実測図	10
第10図 遺物実測図	11
第11図 遺物実測図	12
第12図 遺物実測図	13
第13図 遺物実測図	14
第14図 遺物実測図	15

図版目次

関連頁

図版1 遺跡周辺航空写真(1) 昭和63年撮影	1
図版2 遺跡周辺航空写真(2) 昭和36年撮影	1
図版3 稲見塚古墳航空写真 (富山県公文書館提供)	3
図版4 第1区埴丘斜面全景 (平成5年度調査区)	3
図版5 第1区石垣状造構 (平成5年度調査区)	3
図版6 第2区完掘全景	4
図版7 第2区埴丘斜面全景	4
図版8 テラス部近景・2段目斜面近景	4
図版9 1. 中世墓全景 2. 中世墓断面 3. 土師器皿出土状況 4. 調査風景	5
図版10 1. 第3区1段目斜面近景 2. 弥生溝	5
図版11 1. 第4区周庭帯完掘全景 2. 周庭帯	5
図版12 調査風景	
図版13 遺物写真	8
図版14 遺物写真	9
図版15 遺物写真	9
図版16 遺物写真	11-15
図版17 遺物写真	12
図版18 遺物写真	12

I 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 立山町の歴史及び地理的環境

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43km、南北約21km、面積は308kmである。

地勢は、三角洲や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地にまでおよぶ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。東南部には立山を主峰とする北アルプスの山々が連なり、中央部はそこから続く山地丘陵もしくは河岸段丘、北西部が平野部である。

このため、自然環境も変化に富んでおり、植生の面からは大きく4区分できる。

標高400m以下は暖温帯の照葉樹林帯に属し、かつて重要な食糧資源であったカシ類が多い。

これに統いて標高600~700mまでは、暖温帯の落葉樹林帯に属し、カシ類にまさる食糧資源であるクリ・コナラ・クヌギ類の成育帶で、シカ・イノシシ・ウサギ等の動物が育つ場所もある。

さらに標高1,500mまではブナ類の茂る冷温帯落葉樹林帯、1,500m以上は亜寒帯針葉樹林帯となっている。

立山町が人々の活動の舞台になったのは、現在知られている限りでは、今から約2万年前、平野部の南に隣接する高位河岸段丘上に立地する吉峰遺跡においてである。以後、旧石器～縄文時代には東部から東南部にかけての丘陵上、弥生～古墳時代には北部のデルタ地帯が人々の活動領域となり、古代以降は活動領域が平野部から丘陵部全域へと広がっていった。

2. 古墳の立地（第1図、図版1・2）

今回調査を行った稚児塚古墳は、町の北東部新川地区に所在する。このあたりは、大地形的には常願寺川扇状地扇端部湧水地帯にあたり、そこに柳津川・白岩川などの中小河川が流入して、三角洲・小支谷・自然堤防等の複雑な地形を形成している。このため一帯は、古来から水稻耕作に適した地域として開発が進んでおり、水量豊富な河川を利用した水上交通・水運も発達していた。

周辺には縄文時代から近世に至る多数の遺跡が存在するが、特に水稻耕作が生活の中心となった弥生時代以降、その数が激増し、江上A遺跡のような大規模な集落も多数出現する。

これらの遺跡の中で稚児塚古墳に関連があるものとしては、塚越、竹内天神堂、清水堂、宮塚、若王子、藤塚などの古墳と、柿沢、齊神新に所在する古墳群、浦田前田（縄文時代～近世）、浦田（縄文時代～近世）、浦田西反（弥生時代～近世）、塙越I（縄文時代～近世）、鉢ノ木I（縄文時代～近世）、泉藏留（弥生時代～近世）、若宮B（縄文時代～近世）、辻向田（縄文時代～近世）、辻（弥生時代～近世）、日中源兵衛腰（弥生時代～古墳時代）、湯神子A（縄文時代～近世）、新堀（縄文時代～近世）、中野（縄文時代～古墳時代・中世）、金尾新西（弥生時代～中世）、金尾（縄文時代～中世）、小出城跡（古墳時代・古代）、小池（弥生時代～古墳時代・古代）、魚躬（弥生時代～古墳時代）、本江広野新（弥生時代～古墳時代）、江上A（弥生時代）、江上B（弥生時代～古墳時代）、飯坂（弥生時代）、中小泉（弥生時代）、下経田（弥生時代・中世）、正印新（弥生時代～古墳時代）の各遺跡があげられる。

このような環境の中で、古墳は白岩川の支流である寺田川左岸の微高地上に立地し、また浦田前田遺跡のはば中央に位置する。



第1図 稚兒塚古墳の位置と周辺の遺跡 (S = 1/50,000)

1. 稚兒塚古墳
2. 浦田前田遺跡
3. 浦田遺跡
4. 浦田西反遺跡
5. 塚越I遺跡
6. 鉢ノ木I遺跡
7. 泉森留遺跡
8. 若宮B遺跡
9. 辻向田遺跡
10. 辻遺跡
11. 日中源兵衛腰遺跡
12. 湯神子A遺跡
13. 新堀遺跡
14. 中野遺跡
15. 金尾新西遺跡
16. 金尾遺跡
17. 小出遺跡
18. 魚飼遺跡
20. 本江広野新遺跡
21. 江上B遺跡
22. 江上A遺跡
23. 假坂遺跡
24. 中小泉遺跡
25. 下経田遺跡
26. 正印新遺跡 A. 塚陵古墳 B. 竹内天神堂古墳 C. 清水堂古墳 D. 宮塚古墳 E. 若王子古墳 G. 椿沢古墳群 H. 齊神新古墳群 a. 亀谷窪跡
- b. 中山王塗

II 調査に至る経緯

稚兒塚古墳に関する最古の文献は、東大寺正倉院に伝わる天平宝字3年（759）の「越中国新川郡大藏開田地図」であり、この図中にある「大江辺墓」が稚兒塚古墳であるとする考えがある〔石原 1956〕。

最初の考古学的調査は明治40年に行われており、明治40年に吉田文俊、同41年には坪井正五郎が古墳墳丘の南西部を調査した。この発掘の痕跡は現在も残っているが、墳丘盛土内から縄文時代の大石棒と環石が発見されただけで、古墳に関連した遺構は発見されなかつた。なお、この調査に関連して、明治41年8月14日の富山日報に「坪井博士稚兒塚談」という記事が掲載されているので、以下に概要を載せておく。

「……前略……稚兒塚は土地の人が考定せる如き宗良親王の塚などとは固より受取れぬ附会説でズット古き古墳時代の遺蹟であると思はれます……中略……何分外部の観察のみにて無論断言は出来ませんから内部の調査と併せて観察しなければ何とも云い兼ねます。併し日本に存在せる他の古墳の例によれば此種類の塚の内部には石榔や石棺のある場合が多く……中略……兎に角も内部を調査しなければ確たることは申されぬ、若し発掘でもなさる場合には東南の方より採りを入れて何にか突き当たるものあればそれを便りに掘り下ぐる方を順序といたします云々」昭和30年代、末永雅雄が古墳を訪れて、墳丘の周囲をとりまく水田について、周濠の痕跡であろうと指摘した。

昭和53年、ほ場整備に先立って予備調査が行われ、周濠が存在することと、その境界が周囲水田の輪郭とほぼ一致することが確認された。ただし、調査範囲が限られていたため、古墳本体に関連する遺構は検出されなかつた。なお、遺物は縄文土器・弥生土器・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸などが出土している。

昭和63年、当古墳を含む町北西部の遺跡詳細分布調査が実施され、古墳が浦田前田遺跡の中心に立地することが明らかにされ、また報告書では北陸の他の円墳との比較検討がなされている〔田島 1988〕。

平成4年夏、墳丘への進入路の改修と周濠部水田における宅地造成の計画が提出された。これを受けて、町教育委員会では県教育委員会・地元地権者との間で協議を重ねた結果、平成5～6年度に国庫補助をうけ、古墳の内容確認のための発掘調査を実施することとなつた。

平成5年度調査（第1次）調査期間は8月21日～11月4日の延べ27日間で、発掘面積は約180m²である。この古墳は複数の外部施設を持つ富山県内唯一の大型円墳であり、また遺存状態の良好であることが大きな特徴であったため、破壊することなくその概要を把握することを目的として、墳丘の西側に幅約4mのトレンチを設定して調査を実施した。結果は次のとおりである。

- ① 古墳は、白岩川等によって形成された複合扇状地扇端部の微高地上に営まれた円墳で、墳丘のほとんどは盛り土によって築かれている。墳丘の直径は46mで、高さ約6m、2段又は3段築成と推定され、周囲に幅17mの周濠が巡る。
- ② 墳丘1段目斜面は斜面長約2m、高さ約1.2mで、葺石が施されている。なお、1段目斜面は遺存状態が良好であったが、2段目より上方は中世以後の搅乱を受けている。
- ③ 2段目斜面に相当する箇所では、高さ約60cmの石垣状遺構を検出した。
- ④ 1段目テラスに相当する箇所より、基部長3.4m、同幅3.4m、高さ15～30cmの墓道と見られる施設を検出した。
- ⑤ 遺物は、大量の弥生土器、中世土師器、近世陶磁器等が出土したが、直接古墳に伴うと考えられる時期の遺物は出土しなかつた。

以上のような第1次調査の結果を踏まえ、第2次調査は次のとおり実施した。

平成6年度調査（第2次）第1次調査において確認出来なかつた、墳丘斜面の全体像の把握及び周濠外縁の状況確認を目的として調査を実施した。調査期間は10月18日～12月16日の延べ30日間で、発掘面積は約370m²である。

III 調査概要

1. 墳丘 (第3・5・7図、図版6~8)

a. 墳形と規模 (第3・7図、図版6)

今回の調査区は、墳丘の遺存状態がたいへん良好であり、規模及び形態をかなり正確に把握することが出来た。

墳丘は、ほぼ平坦な微高地に築かれており、第1次調査の結果とも併せて考えると、墳丘本体のほとんど全てが盛土によって造られている。円形をなす墳丘は2段築成であり、直径46m、高さは約8.5mを測る。なお、1段目斜面の下部は地中に埋没しているため、水田面との比高は約7.4mである。ここから算出される盛土の総量は約1,500m³で、この膨大な量の盛土は後述する周濠及び周庭帯の掘削によって出土を利用したものであろうと考えられる。

また、この古墳では、墳丘本体の下に葺石を備えない高さ約1mの基底部が、地山削り出しによって形成されている。したがって、墳丘の見かけ上の大きさは直径51m、周濠底面からの高さは9.5mになる。

墳丘の断面形態は、斜面の途中に幅約1.5mの狭いテラスを造っており、1段目・2段目とともに斜面途中で角度を変換するという珍しい形態をとる。すなわち、裾部からは33°という急角度で立ち上がり、3m程度上からは25~28°へと角度を減じている。このため、古墳の形態はきれいな断頭円錐形とはならず、墳丘の規模に対して極端に狭いテラスの形状も影響して、あたかもマンジュウを2個重ねたような景観を呈する。

b. 葦石 (第5図、図版7・8)

葦石の検出は、第1区においては1段目斜面下半部に限られていたが、第2区においては墳丘裾から墳頂に至る斜面全面および、古墳築造当初の姿を良く伝えている。

第2区及び第3区の範囲内において葦石の状況を見てみると、1段目・2段目ともに斜面下半部の遺存状態が特に良く、ほとんどの石が原位置を保っていた。これに比べて、斜面上半部の遺存状態はあまり良いとはいわず、葦石の痕跡は多く認められたものの、原位置を保っていた石はわずかであった。

石の葺き方は、1段目斜面が平積みで、2段目斜面は小口積みとなっており、テラス部を壠にして上下で葺き方を変えている。また、最も遺存状態の良い1段目斜面下半部では部分的に葦石区画石列を確認できたが、全体に平積みの葦石の中で、縦横方向の葦石区画石列の交わる箇所だけには小口積みがなされている。

石の葺き方において最も特徴的な点は、テラス部にも斜面同様に石が葺かれている点で、このため積石塚と見間違えばかりの外観を呈している。類例としては東京都の野毛大坂古墳が知られる。

石材は全て常願寺川系の河原石とみられる円錐で、長径10cm程度のものから長径60cm程度のものまでが使用されている。長径60cm前後の最大の石は1段目斜面壠の根石として利用されており、全体的に1段目斜面には2段目斜面に比べて大きな石を使う傾向が見てとれた。これは、先述した葺き方の違いによって、石材を選択したためであろう。

1m²当たりの葦石の量は60~70個で、最も遺存状態の良い箇所では2~3層に葺かれている。これから算出される葦石の総量は、少なく見積もっても約125,000個・約500トンである。

なお、第1区において検出した石垣状遺構は、その場所・標高等から、テラス外端部の葦石下に位置することとなり、古墳の完成時には葦石の下に隠れた状態であったものと考えられる。類例は長野県更埴市森将军塚古墳が知られる。

2. 周濠 (第3図、図版6)

第1区においては調査区設定上の限界から、また中世の溝による攪乱から、周濠の規模等を厳密に把握することが出来なかつたが、第2~第4区(今年度調査区)においては良好な状態で検出され、規模・形状等を正確に確認出来た。

規模は、上部幅約13m、底面幅約8.5m、深さ90~140cmで、断面形態は幅広の逆台形状を呈する。底面の標高は13.2~13.7mで、外側へ行くに従って高くなっている。

従来の知見では墳丘周囲の水田形狀が周濠と概略一致すると考えられていたが、第1~第4区における調査結果からは周濠の幅は周囲の水田の形狀とは關係無く一定であり、幅約13mの周濠がほぼ円形に墳丘の周囲を巡るものと推定される。

3. 周庭帶（第4図、図版11）

第2区及び第4区において、周濠の外側の整地帶=周庭帶を検出した。幅は約12mで、古墳の最外部を巡っているものと推定される。なお、北陸における周庭帶の検出は、これが初例である。

断面形態は、周濠の外端から5~6mの斜面がゆるやかに立ち上がり、頂部に幅約1mの平坦面を作った後、10~15cmの段差を設け、外側には幅5~6.5mの一段低い平坦面が形成される。さらに、この一段低い平坦面の外端には20cm前後の段差を設けて、整地面の区画としている。

調査に際しては、周庭帶における外部施設の存在を想定して床面を精査したが、杭列等の外部施設の痕跡は一切検出できなかった。また、周庭帶中央の盛り上がりから土壘の存在を想定して精査したが、調査区の断面土層からはその裏跡は検出できなかった。

なお、この周庭帶は全体が地山削り出しによって形成されており、地山の土質は墳丘の盛土と同一のものである。

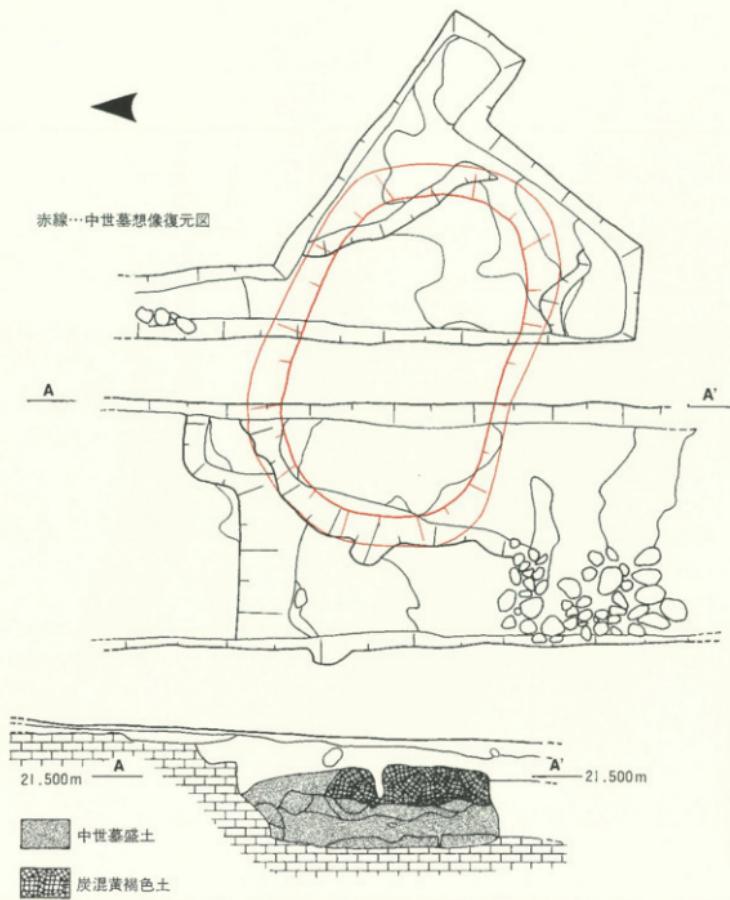
4. 中世墓（第6図、図版9）

第2区内の墳頂部南端において、中世の墓とみられるマウンドを検出した。規模は長径約3m、短径約2m（推定）、高さは約60cmである。古墳の盛土を掘り込んで、その上にマウンドを築いている。盛土中から緑色凝灰岩製の管玉2点と、完形の土師器皿1点が出土した。土師器皿は盛土の下部から、上向きに置かれた状態で出土した。土師器の年代から、この墓は16世紀中葉に造られたものと推定される。また、盛土中に炭化物が混ざっており、火葬墓の可能性がある。

管玉2点は盛土の上部から出土しており、このことから、この墓を造るにあたり、古墳の墳頂部を一部削って、その土で盛土をしたと推測される。

5. 溝（弥生）（第3・4、図版10）

第2区・第4区の周庭帶内において、溝状遺構を検出した。第2区で3条、第4区で4条、計7条である。溝は、第2区においては溝1~3が東西方向に、第4区においては溝4~6が南西から北東に向いて、それぞれ3本が平行に並んだ状態で検出された。溝7は、溝4と重なった状態で検出され、調査中に消滅した。規模は溝1が最も大きく、幅約90cm、深さ約35cmである。その他のものは幅約20~40cm、深さは約10cmである。いずれも覆土は黄褐色粘質土混じり黒褐色土である。溝1~6は、古墳を中心にして南から南東にかけて円を描くようにのびて、次第に浅くなり、古墳の南東で消滅する。調査区が異なることから便宜上溝1~6としたが、位置関係から、溝1は溝4と、溝2は溝5と、溝3は溝6とそれにつながるものであろう。溝の覆土中からは弥生時代の土器が出土した（第9・10図）。土器の年代から、これらの溝は全て同時期のものと考えられる。前回の調査で弥生時代の遺物の多くが墳丘盛土中から出土したこと、墳丘の盛土が周囲の地山と同質であり、周濠の掘削によって出た土を利用して古墳を築造したとみられることなどを併せて考えれば、溝の描く円の内部、すなわち現在古墳のある場所に、弥生時代の集落が存在したとみることができる。集落は古墳の築造に伴って破壊され、集落を巡っていた溝も、周庭帶を形成する際に上部が削られ、あるいは消滅したものと考えられる。



第6図 中世墓実測図 ($S = 1/40$)

平成 5 年度調査（第 1 区）

擾乱部

石垣状邊端

黄石崩落部分(一段斜面(上部))

一段目斜面(下部)

基底部

二段目斜面

平成 6 年度調査（第 2 区）

テラス

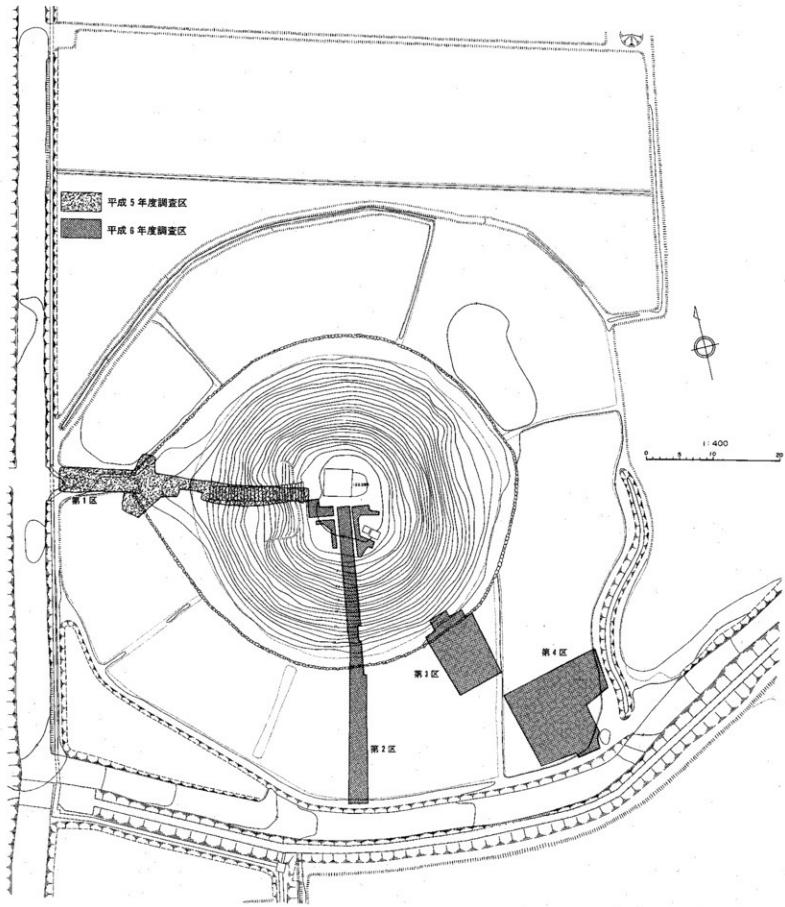
一段目斜面

16.000m

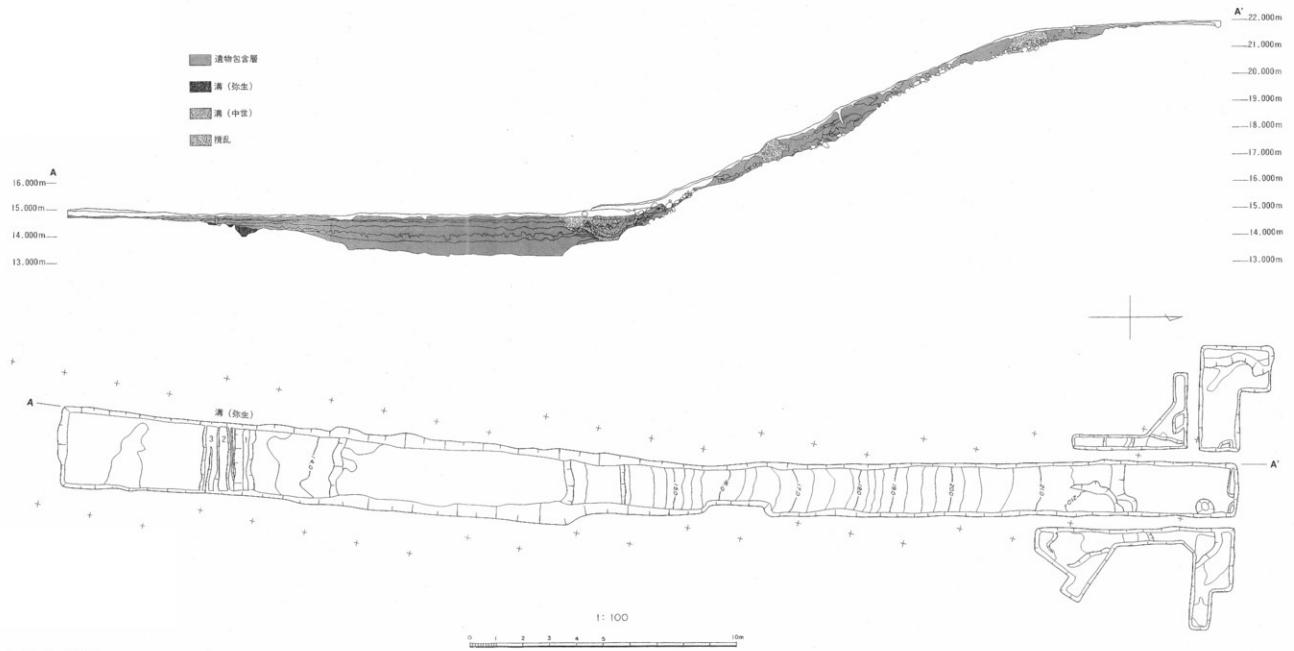
0
5m



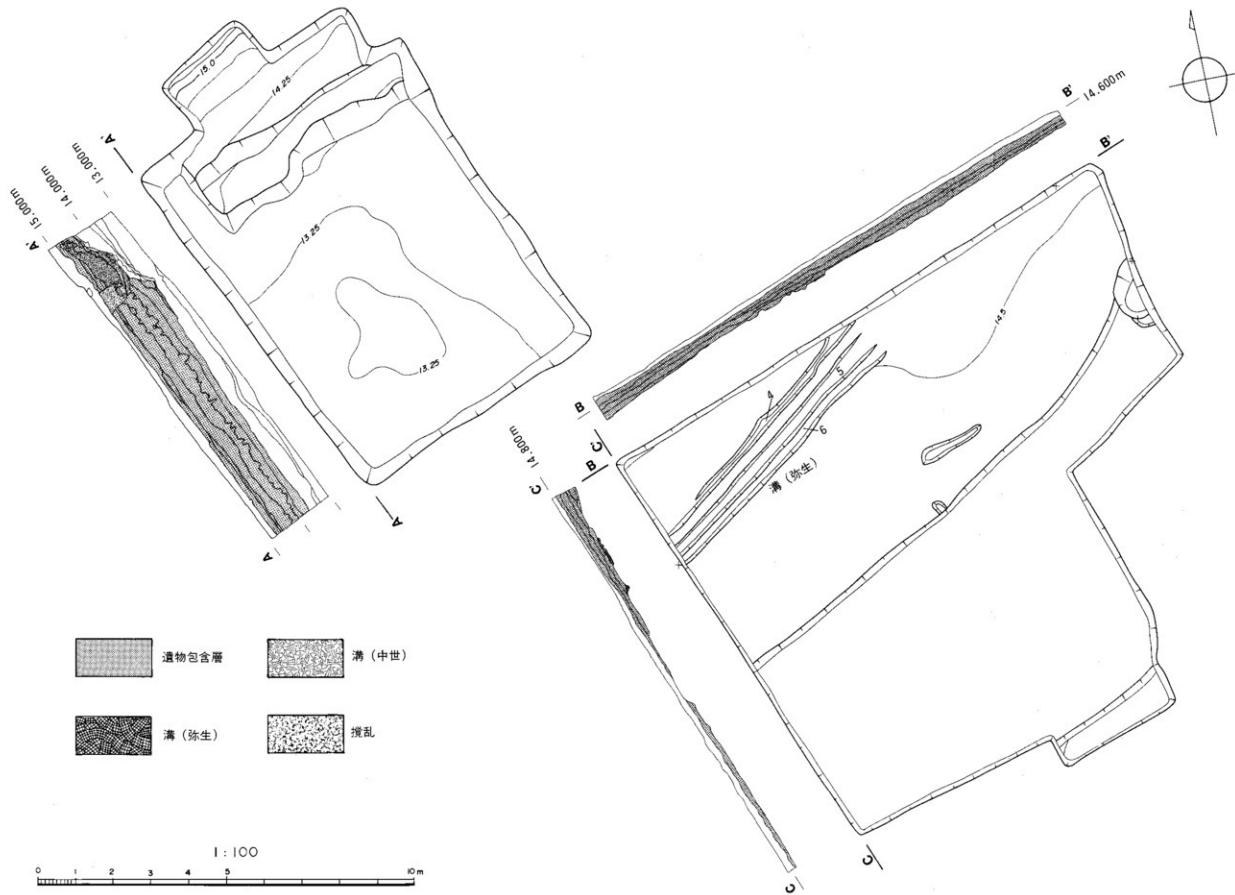
第 7 図 填丘斜面模式図



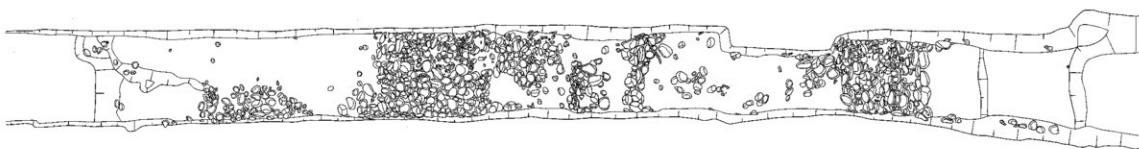
第2図 地形と区割図



第3回 第2区全体図



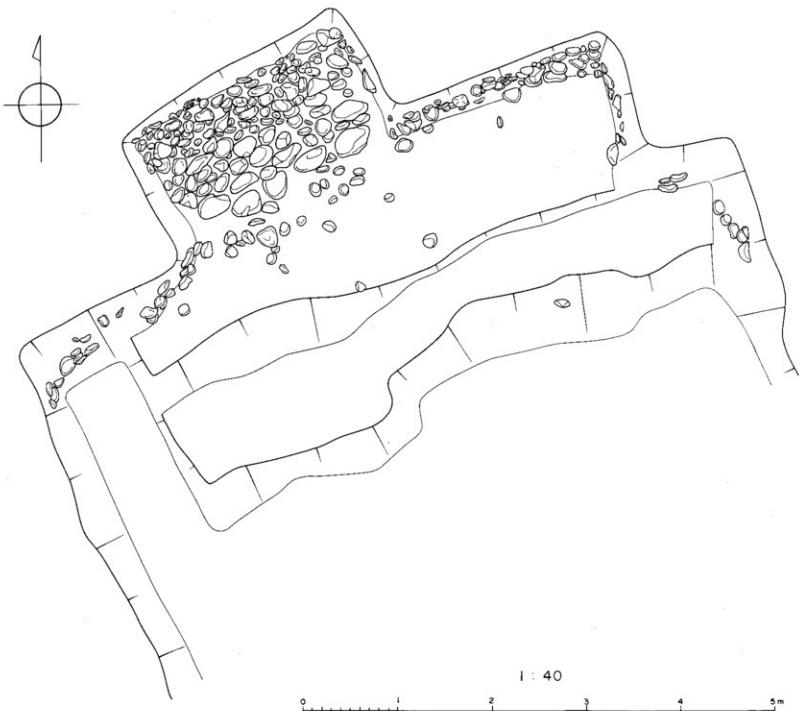
第4図 第3、4区全体図



1:40

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9

112 113 114 115



第5図 塗丘墓石室測図(2) 第3区

6. 出土遺物 (第8図～第14図、図版13～図版18)

a. 土器

(1) 縄文時代の遺物 (第8図1～3、図版13)

縄文時代の遺物は1が溝4埋土、2が溝6埋土、3が穴2埋土から出土した。

1は浅鉢である。外反する口縁部で、途中で鋸く上方に屈曲する。外面にはRの撚糸文が施紋される。時期は不明である。2・3は縄文を施した胴部破片で、2にはRの撚糸文、3にはRL縄文を施す。時期は不明である。

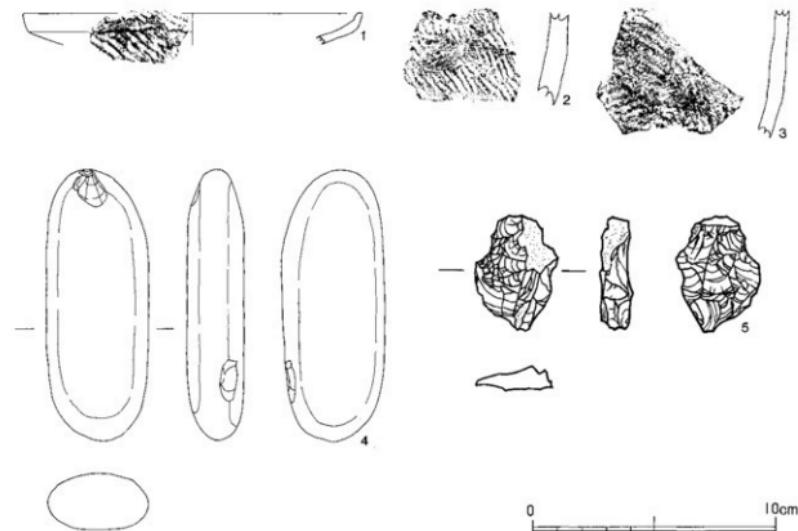
(2) 弓生時代の遺物 (第9・10図、図版14・15)

弥生時代の遺物は20が溝1埋土、45が溝2埋土、8・18・25・39が溝3埋土、14が溝4埋土、30・34が溝5埋土、27・43が溝6埋土、9が溝7埋土から出土した。他の多くの遺物は全て包含層からの出土である。また全形を知り得る器種が少なく、分類基準は主に口縁部の形態差によった。

器種は、壺・甕・高杯・器台・有孔鉢・紡錘車がある。

壺 (6～9・25)

6は長頸壺と考えられ、直立する口縁部に口唇部外面を弱く面とりするものである。口縁部内面の下部にハケ目を施す以外、口縁部内外面の上部にはヨコナデを行う。法仏式～月影式のものと考えられる。7はくの字口縁をもつ壺で、口唇部端面を上方へ引き出しこな口縁帯をつくる。口縁帯外面には弱い2条の沈線を施す。内外面の調整は不明である。法仏式～月影式のものと考えられる。8はくの字口縁をもつ広口壺で、口唇部外面を面とりし小さな口縁帯をつくる。頸部の屈曲は弱い。内外面全面をヘラミガキ調整する。法仏II式～月影I式のものと考えられる。9は有段無紋口縁をもつものである。有段口縁は直線的に立ち上がる。内外面の調整は不明である。法仏式～月影式のものと考えられる。また25は壺の底部と考えられよう。小さな円盤状の突出底で、外底面がわずかに凹む。内外面には



第8図 遺物実測図 (5のみ実大)

ヨコナデを行う。

彫 (10-24・26)

10は有段無紋口縁をもつものである。有段口縁部は狭く、わずかに屈曲して直線的に立ち上がる。また頸部は鋭く屈曲する。有段部から頸部内外面にかけてはヨコナデ、肩部内面にはヘラケズリを行う。法仏II式～月影I式のものと考えられる。11は近江系統受口状口縁壺である。口縁部はしっかりと屈曲するが、口唇部上端は丸くおさめる。受口部外面には弱い3状の擬凹線を施す。受口部内面にはヨコナデを行う。法仏式～月影式のものと考えられる。12はくの字口縁に、狭い口縁帯をもつもので、口唇部外面を面とりする。口縁部から頸部内外面にかけてヨコナデを行う。法仏II式～月影II式のものと考えられる。13も12と同じくくの字口縁に、狭い口縁帯をもつもので、口唇部外面を上下に引き出し面とりする。口縁部から頸部内外面にかけてはヨコナデ、肩部外面にはハケ目調整、肩部内面にはヘラケズリを行う。法仏II式～月影II式のものと考えられる。14も11と同じく近江系統受口状口縁壺である。口縁部はしっかりと屈曲し、口唇部上面を面とりする。受口部内外面にはヨコナデを行う。法仏II式～月影I式のものと考えられる。15も同じく近江系統受口状口縁壺である。口縁部はしっかりと屈曲し、口唇部上面を面とりする。受口部内外面にはヨコナデを行う。法仏II式～月影I式のものと考えられる。16も同じく近江系統受口状口縁壺である。受口部外面には刺突紋を施す。受口部外面の屈曲は緩く、口唇部上面も丸くおさめる。受口部外面にはヨコナデを行う。月影I式のものと考えられる。17は有段無紋口縁をもつものである。有段部外面の屈曲は極めて弱い。また口唇部上端をわずかに面とりする。18も同じく有段無紋口縁をもつものである。有段部外面は強く屈曲するが、内面は直線的である。有段部外面にはヨコナデを行う。法仏式～月影式のものと考えられる。19はくの字口縁をもつものである。口唇部外面に狭い口縁帯をもつ。頸部の屈曲は弱い。口縁部外面にはヨコナデ、頸部外面にはハケ目調整を行う。法仏式～月影式のものと考えられる。20も同じくくの字口縁をもつものである。口唇部は丸くおさめる。頸部の屈曲は弱い。口縁部外面にはヨコナデを行う。法仏式～月影式のものと考えられる。21も同じくくの字口縁をもつものである。口唇部外面に狭い口縁帯をもつ。頸部は緩くカーブする。口縁部外面にはヨコナデを行う。法仏式～月影式のものと考えられる。22も同じくくの字口縁をもつものである。口唇部外面に狭い口縁帯をもつ。頸部は緩くカーブする。口縁部外面にはヨコナデを行う。法仏式～月影式のものと考えられる。23は体部破片である。外面には条痕紋らしき擦痕を残す。また内面には楕圧痕が認められ、中に纏がわずかに残存する。弥生時代中期初頭前後の柴山出土式まで遡る可能性が考えられよう。24は天王山式系統のものである。内済ぎみに外反するくの字口縁をもち、口唇部を面とりしてそこに繩紋を施す。また口縁部外面にもRの繩紋を施す。弥生時代中期後半のものと考えられる。また26は壺の底部と考えられる。小さな平底をもつ。外面には粗いハケ目調整を施す。

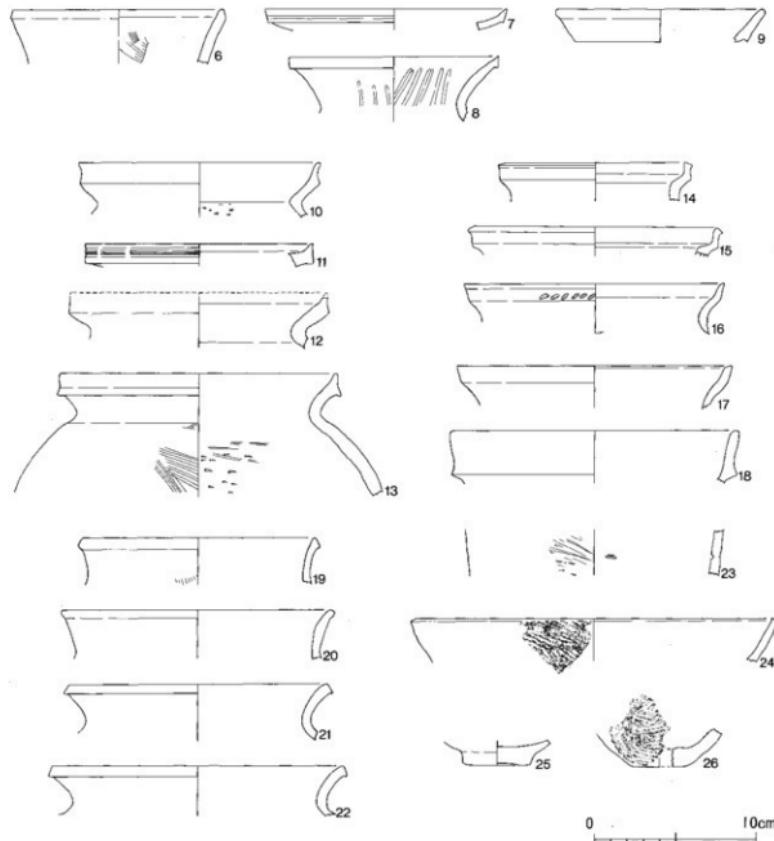
高杯・器台 (27-42)

27は杯部が屈曲して、短く外反する口縁部をもつものである。口唇部には外傾して面とりをする。外面にはヘラミガキを行う。法仏II式～月影II式のものと考えられる。28も杯部が屈曲して、短く外反する口縁部をもつものである。口唇部には外傾して面とりをする。杯部内外面にはヨコナデ、杯部外底面にはハケ目調整を行う。法仏II式～月影II式のものと考えられる。29は杯部の破片である。27・28と同じように杯部が屈曲して、短く外反する口縁部をもつものである。杯部内外面にはヨコナデを行う。高杯または器台の脚裾部の可能性も考えられよう。法仏式～月影式のものと考えられる。31-35は高杯または器台の脚裾部で、八の字状に開く。31は据端部に明瞭な面をもつ。内外面の調整は不明である。32も据端部に明瞭な面をもつ。外面にはヘラミガキ、内面にはヨコナデを行う。33は据端部に丸めの面をもつ。外面にはヘラミガキ、内面にはヨコナデを行う。34は据端部に明瞭な面をもつ。内外面にはヨコナデを行う。35は据端部を丸くおさめる。外面にはヘラミガキ、内面には粗いハケ目調整を行う。これらは法仏式～月影式のものと考えられる。36・

37は器台の脚端部である。36は外面にヘラミガキ、内面にはハケ目調整を行う。37は内外面にヘラミガキを行う。法仏式～月影式のものと考えられる。38～42は高杯または器台の脚裾部で、柱状の脚柱部をもつタイプと考えられる。38は脚端部を上下に引き出し明瞭に面とりする。外面にヨコナデを行う。39は脚端部に幅広い口縁帯をもち、そこに三角形状の刺突紋を3段に施す。そしてその上から赤彩する。内外面にはヨコナデを行う。40は脚端部下端に幅広い面をもつ。内外面の調整は不明である。41・42は脚裾部を2段に面とりし、脚端部下面に幅広い面をもつ。外面にヘラミガキ、内面にヨコナデを行う。これらは法仏式～月影式のものと考えられる。

鉢 (43)

有段無紋口縁をもつものである。有段口縁は直線的に外反し、外面に弱い稜をもつ。口唇部外面を面とりする。内外面にはヨコナデを行う。法仏式～月影式のものと考えられる。



第9図 遺物実測図

有孔鉢 (44・45)

44は有孔鉢の口縁部から体部上半の破片である。体部が外反して立ち上がり、口唇部にやや内傾する面をもつ。内面に雜ぎ目痕を残す。体部外面には粗いハケ目調整を施す。45は底部破片である。底部下面是ドーナツ状にやや凹み、底部下面より柱孔を穿つ。外面にはハケ目調整を行う。これらは法仏式～月影式のものと考えられる。

紡錘車 (46)

ほぼ完形に近い紡錘車で、上面から穿孔する。色調は暗茶灰色を呈し、緻密な胎土で石英の細粒を多く含む。他の土器類とは明らかに胎土を別にする。時期は不明である。

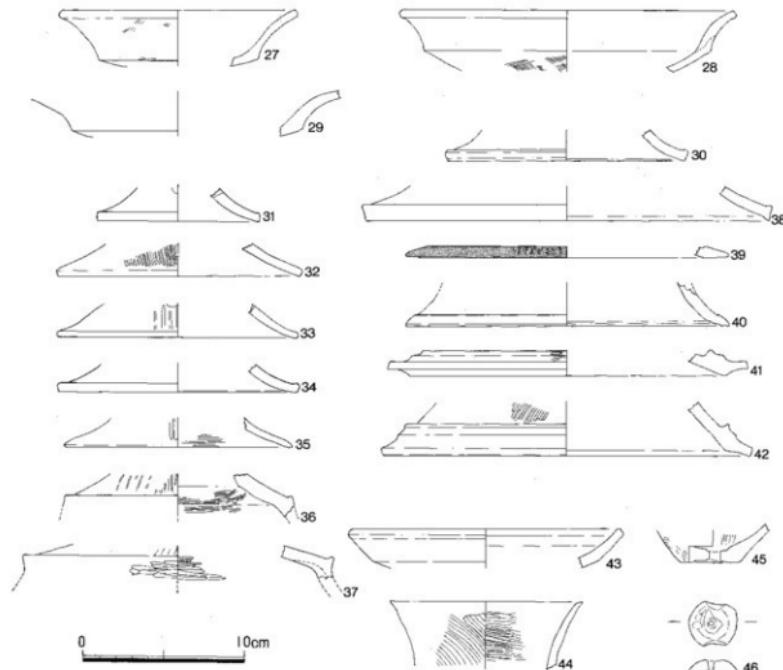
(3) 奈良時代の遺物 (第11図、図版16)

奈良時代の遺物は2つとも包含層からの出土である。

土師器壺、須恵器短頸壺がある。

土師器壺 (47)

体部から口縁部にかけて内傾して立ち上がり、口唇部を上方に引き出し丸くおさめる。内外面には粗いハケ目調整を施す。



第10図 遺物実測図

須恵器短頸壺 (48)

口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部がやや内傾して立ち上がるもので、口唇部を丸くおさめる。頸部の屈曲は弱い。内外面にはロクロナデを施す。焼成は還元焼成である。9世紀末～10世紀初頭のものと考えられる。

(4) 中世以降の遺物 (第12・13図、図版16～18)

中世以降の遺物は57が中世墓内、56・60が溝3埋土、49・55が溝6埋土から出土した。他は全て包含層からの出土である。

土師皿・珠州鏡、越中瀬戸などがある。

土師皿 (49～58)

土師器皿はすべて手捏ね成形による。口径9cm以上のもの (55～58)、口径7～8cm前後のもの (49～54) に大別できる。

55・56は口縁部をヨコナデして外反させるものである。口唇部は尖る。いずれも16世紀後半のものと考えられる。

57は完形品である。口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がり、口唇部は尖る。底部と体部との境には、成形時に体部を引き起こした指頭圧痕が認められる。また底部下面には板目圧痕が残る。内面と口縁部外面にはヨコナデを施すが、体部外面は未調整である。16世紀末のものと考えられる。

58は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口唇部は尖る。内面と口縁部外面にはヨコナデが施されるが、体部外面は未調整である。器壁が薄く、灰白色の色調を呈するなど近世の土師皿と考えられる。

49～54は口唇部を揃へてナデすることにより口縁部が短く立ち上がる。また口唇部は尖る。内面と口縁部外面にはヨコナデが施されるが、体部外面は未調整で成形時の指頭圧痕が残る。なお52は口縁部外面にタール状のものが付着している。これらも58と同じく全般的に器壁が薄く、灰白色の色調を呈するなど近世の土師皿と考えられる。

珠洲 (59～61)

すり鉢 (59)

口縁部から体部にかけての破片である。体部はわずかに膨らみをもって開き、口縁部付近で内湾気味に立ち上がる。口縁端部には外傾するしっかりとした面取りを施す。体部内面には流水状の深いおろし目が施される。またおろし目の歯車原体は1単位幅1.1cm、9目である。内外面にはロクロナデを施す。珠洲Ⅱ期のものと考えられる。

捏ね鉢 (60)

体部破片である。内外面をロクロナデで仕上げた後、内面に印花紋を施す。珠洲Ⅱ～Ⅳ期のものと考えられる。

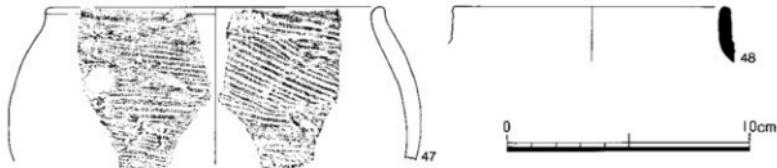
甕 (61)

底部破片である。外面には粗く浅い平行叩き目を施す。底部は砂底成形である。

内面が摩滅しており、二次的に使用された可能性が高い。珠洲Ⅳ期のものと考えられる。

越中瀬戸 (63・64・66～74)

皿 (63・64・72)

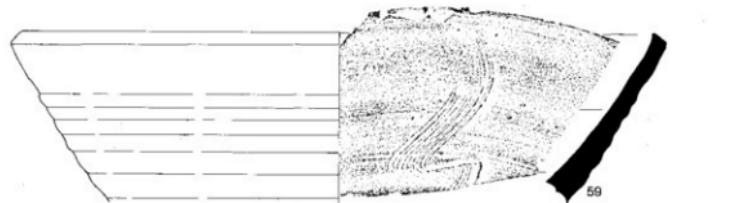
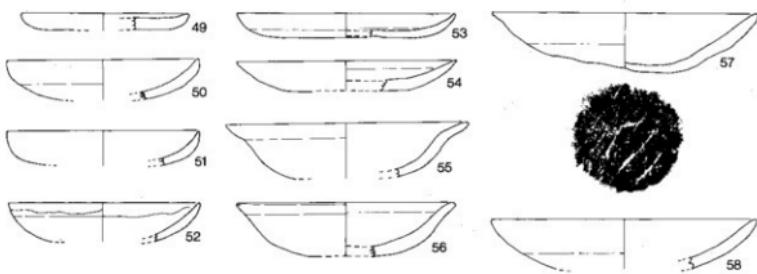


第11図 遺物実測図

63は内湾する口縁部で、口唇部を丸くおさめる。体部内面から体部上半外面にかけて灰白色に発色する釉を施す。64は内湾する口縁部で、口唇部をやや尖らせる。口縁部内外面には灰黄色に発色する釉を施すが、一部は灰黄色に発色する。72は底部破片である。高台を割り出して断面三角形に仕上げている。底部内面には黒色に発色する鉄釉を施し貫入が入る。

椀 (66・67・71)

66は口縁部から底部にかけて全体の約半分が残存する。口縁部から体部にかけて直立し、口唇部をやや丸く尖らせる。また体部下半を削り出して強く屈曲させる。底部は高台を削り出して断面梯形に仕上げている。内面全体から外面の高台上半にかけて茶褐色に発色する鉄釉を施す。67は口縁部から体部上半にかけて外反ぎみに直立する。また口



第12図 遺物実測図

唇部上面を面とりして内面をやや肥厚させる。内外面には茶褐色に発色する鉄釉を施す。72は平底で、回転糸切り痕を残す。内面から底部下面にかけて茶褐色に発色する鉄釉を施す。

壺 (68・69)

68はやや外反ぎみに短く立ち上がる口縁部で、口唇部を丸くおさめる。頸部の屈曲は緩く、体部は直立する。内外面ともに無釉で、ロクロナデを施す。骨壺と考えられる。69は短く直立して立ち上がる口縁部で、口唇部上面を平坦に面とりする。頸部外面に門線を施してくびれ部を成形するが、内面は緩く彎曲させたままである。また肩部には成形具かと思われる痕跡が弱い凹線状になって残る。内外面にはロクロナデを施す。そして茶褐色に発色する鉄釉を施すが口唇部上面は無釉とする。

匣鉢 (70)

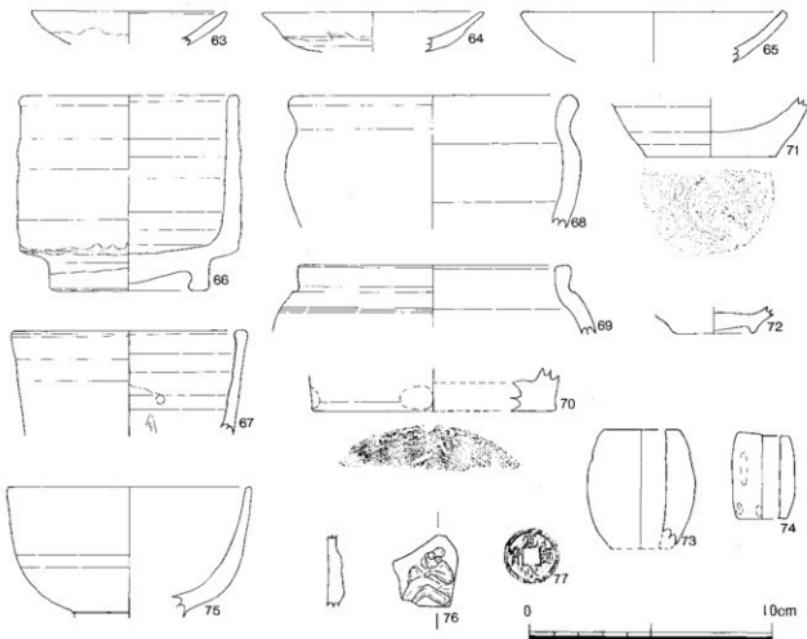
平底で、糸切り痕を残す。また底部近くの外面には指頭圧痕を残す。内外面にはロクロナデを施す。そして内外面のみならず底部にまで茶褐色に発色する鉄釉を施す。

陶鍋 (73・74)

73は約4分の1ほどが残存する。内外面には茶褐色に発色する鉄釉を施すが、一部は灰黄色に発色する。74は約2分の1が残存する。外面に指頭圧痕が残る。内外面ともに茶褐色に発色する鉄釉が一部認められる。

不明近世陶磁器 (65・75)

65は皿である。内溝する口縁部で、口唇部を丸くおさめる。内外面に暗緑色に発色する釉を施す。75は高台付きの



第13図 遺物実測図

楕である。内沟ぎみに立ち上がる口縁部で、口唇部は丸くおさめる。内外面に透明な釉を施し貫入が入る。

その他 (76・77)

76は猿の毛繕い状の紋様を壓押しした土製品である。77は寛永通宝である。

b. 石器

(1) 純文時代 (第8図、図版13)

叩石 (第8図4)

第4区の遺物包含層中から出土した。長さ11cm、幅4.2cm、厚さ2.3cmの扁平な棒状の石器である。重量188.7g。石材は砂岩である。一方の端部に敲打による欠損がみられる。

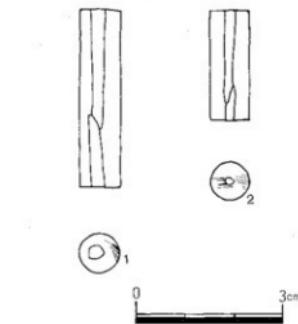
剝片 (第8図5)

同じく第4区の遺物包含層中から出土した。長さ2.3cm、幅1.6cm、重量2.2gである。石材はメノウである。

(2) 古墳時代

管玉 (第14図1・2、図版16)

2点出土した。1は直径8.5mm、長さ36.5mm、重量4.9g、2は直径8.1mm、長さ22.5mm、重量2.2gで、ともに緑色凝灰岩製である。1・2とも両面



第14図 管玉実測図

穿孔を行う。上・下面に研磨痕が残っており、側面にのみ仕上の研磨を行ったものと思われる。穿孔部に使用痕が認められず使用方法は不明であるが、上・下端部が若干摩滅しており、伝世品の可能性がある。2点とも、墳頂近くに造られた中世墓盛土中から出土しており、原位置をとどめていない。中世墓を造る際に古墳の墳頂部が搅乱を受けたと考えられる。

IV 調査成果

平成5年度には墳丘西側斜面（第1区）の調査を行い、平成6年度には墳丘南側斜面（第2区）、南東側斜面下部（第3区）および古墳南東側外縁部（第4区）の調査を行った。この2年間の調査により、従来不明瞭であった稚兒塚古墳の概要はかなり把握されたものと考える。ただし、古墳を破壊しないことを大前提としていたため、把握した概要是外部施設に関するものに限られる。以下に、2年間の調査結果の概要をまとめておく。

- ① 稚兒塚古墳は、白岩川等によって形成された複合扇状地崩端部の微高地上に営まれた円墳で、地山削りだしによって形成された直径51m・高さ約1mの基底部上に、墳丘のはんどんを盛土によって築かれている。

墳丘は直径46m・高さ約8.5mを測る。2段築成で、各段の斜面は途中で角度を変換している。また、テラスの幅は1.5m前後であり、墳丘の規模に比べて著しく狭小である。

- ② 葦石は、常願寺川系の河原石を主体とする。第2・3区においては遺存状態がきわめて良く、今次の調査においては調査面積が限られていたため区画石列の一部を検出したにとどまったが、調査面積の制約が無ければ施工方法の全体像を把握することも可能であろうと考える。

テラス部にも斜面同様に石が葺かれる点は特徴的であり、このため積石塚と見間違うばかりの外観を呈している。

類例としては東京都の野毛大塚古墳が知られるが、時期及び規模の似通った両古墳に地域を超えた特異な共通点のあることは、両地域の文化的・技術的交流を示唆するものと考えられる。

- ③ 平成5年度に検出した石垣状遺構は、平成6年度の調査成果と合わせて考えると、テラス外端部の葺石下に位置することとなり、古墳の完成時には葺石の下に隠れた状態であったものと考えられる。これは長野県更埴市の森将軍塚古墳で検出された墳丘の盛土工程における土留め及び区画の石垣に類似しており、稚兒塚古墳においても同様の築造技術が使われていたことを示唆している。

- ④ 平成5年度の調査において、1段目斜面下部葺石と石垣状遺構の中間地点で、基部長3.4m・同幅3.4m・高さ15~30cmの墓道と見られる施設を検出したが、平成6年度の調査成果と合わせて考えると、これも古墳の完成時には葺石の下に隠れた状態であったものと考えられる。この施設が埋葬儀礼に伴う墓道であるならば、古墳の築造過程と埋葬儀礼の関係を考える上で興味深い施設と言えるが、現時点では類例が無いため推測の域を出ない。

- ⑤ 墳丘の周囲には、幅約13mの周濠と、幅約12mの周庭帯が巡る。古墳の墓域を考えると、稚兒塚古墳においてはこの周庭帯の外端までが範囲と考えられ、その規模は直径96mと巨大なものになる。

なお、周庭帯の検出は北陸では初めてであるが、畿内の古墳には周庭帯の存在が知られており、稚兒塚古墳の築造に際して畿内の強い影響力が及んでいた証拠と言えるであろう。また従来、古墳の墓域は墳丘本体あるいは周濠までとする考え方方が主流となっていたようであるが、当古墳における今回の発見は地方における「周庭帯をも含む墓域」の存在を証明した結果となり、平野部に立地する古墳時代中期の大型古墳に限っては、その全体像を見直す必要が出てきたと言えるであろう。

- ⑥ 墳丘の頂頭南端部において、高塚状の中世墓を検出した。I区においては中世土師皿が大量に出土しており、内面に墨書きをもつという特異な例も多かったが、これらはこの中世墓に伴う儀礼に使用されたものと考えられる。

- ⑦ 遺物は、大量の弥生土器、中世土師器、近世陶磁器等が出土したが、直接古墳に伴うと考えられる時期の遺物は管玉2点が出土したにとどまった。この遺物の少なさに対する評価は分かれる所であろうが、ここでは、北陸において古墳の供獻土器等が著しく減少した時期=古墳時代中期前葉に稚兒塚古墳が築かれた間接的証拠として評価したい。

以上の調査成果から稚兒塚古墳の意義を考えるなら、「日本海沿岸において畿内の強い影響力のおよぶ最東部域で、

信濃及び関東地方と独自の文化・技術交流を保ちつつ、5世紀前葉に築造された越中国の大首長墓」という評価が与えられるであろう。

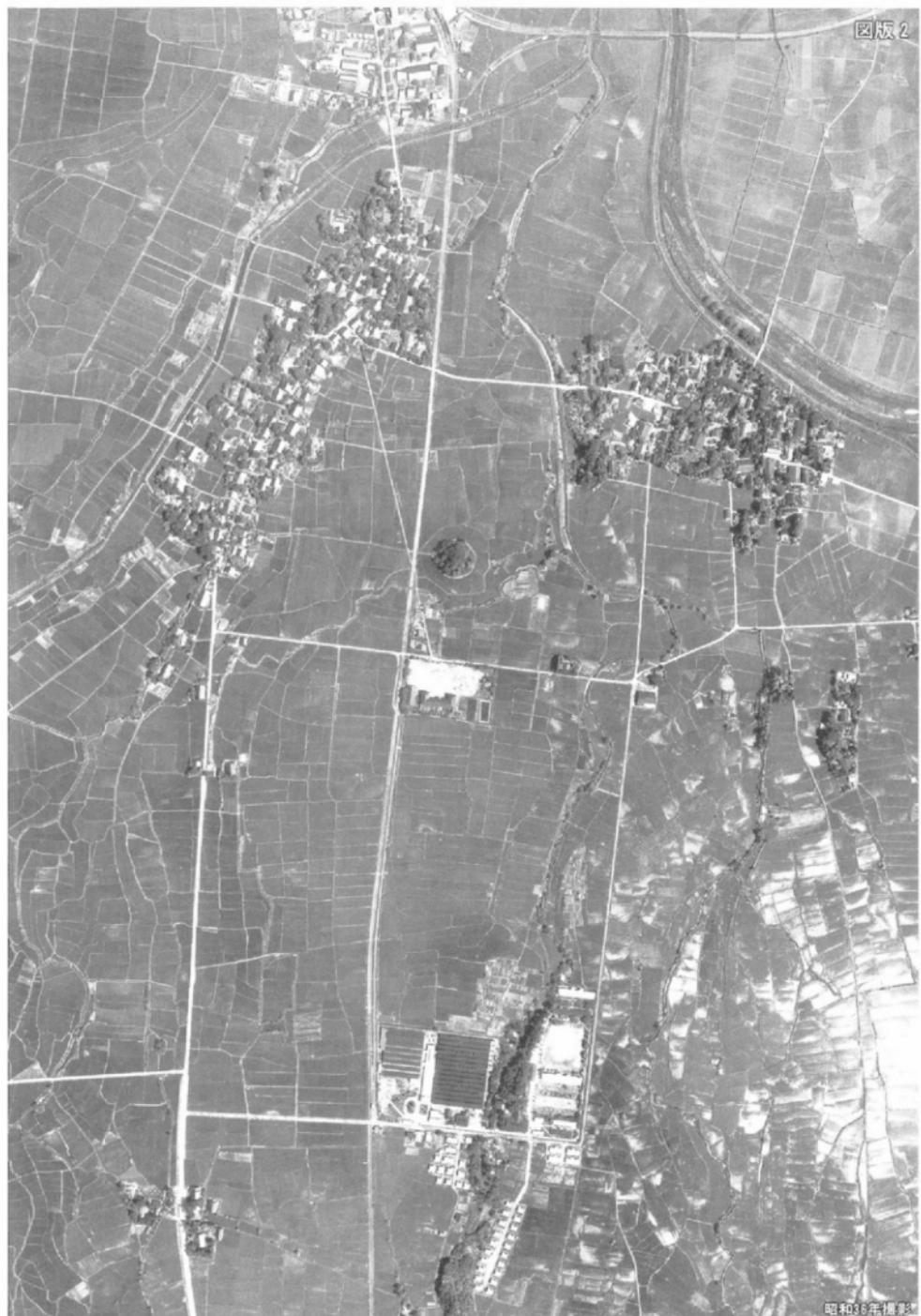
以上のように、2年間にわたる調査においては、「墳丘内の石垣状遺構」「テラス部の葺石」「墓道」といった数々の新知見が得られたが、これらは古墳時代の技術交流、祭祀のあり方を考えるうえで重要な発見であると言えよう。

(二編)

参考文献

- イ 石塚久則 1992「3 外部施設、2 裝石」『古墳時代の研究 第7巻』雄山閣出版
石原与作 1956『白岩川中流域の歴史的事実一弓庄・寺田郷の研究』
一瀬和夫 1992「3 外部施設、1 周濠」『古墳時代の研究 第7巻』雄山閣出版
岩崎卓也 1992「1 総論」『古墳時代の研究 第7巻』雄山閣出版
オ 小矢部市教育委員会 1986『若宮古墳』
小矢部市教育委員会 1988『谷内16号古墳』
カ 施西町教育委員会 1993『雨の宮古墳群—環境整備事業に係る第1次発掘調査概報』
上市町教育委員会 1981『富山県上市町弓庄城跡—緊急発掘調査概要』
上市町教育委員会 1982『富山県上市町弓庄城跡—第2次緊急発掘調査概要』
上市町教育委員会 1983『富山県上市町弓庄城跡—第3次緊急発掘調査概要』
上市町教育委員会 1984『富山県上市町弓庄城跡—第4次緊急発掘調査概要』
上市町教育委員会 1985『富山県上市町弓庄城跡—第5次緊急発掘調査概要』
上市町教育委員会 1993『富山県上市町柿沢古墳群—第1次測量調査報告書』
加悦町教育委員会 1981『後野円山古墳群発掘調査報告書』
キ 木下亀城・小川留太郎 1967『標準原色図巻全集 第6巻』保育社
ク 久々忠義 1979「3 雉児塚古墳会」『富山県立山町埋蔵文化財予備調査概要』立山町教育委員会
コ 更種市教育委員会 1973『長野県森將軍塚古墳』
シ 白石太一朗 1985『古墳の知識 墳丘と内部構造』東京美術
タ 田島富滋美 1989「第3章 北陸における大型円墳の規模とその意義」『立山町埋蔵文化財分布調査報告書IV』立山町教育委員会
立山町教育委員会 1987『辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要』
立山町教育委員会 1989『立山町埋蔵文化財分布調査報告書IV』
立山町教育委員会 1991『辻遺跡—第3次発掘調査報告書』
ツ 都出北呂志 1992「2 古墳の墳丘、1 墳丘の形式」『古墳時代の研究 第7巻』雄山閣出版
ト 富山県教育委員会 1987『北陸自動車道遺跡調査報告—朝日町編3—馬場山D遺跡・馬場山G遺跡・馬場山H遺跡』
ノ 野毛大坂古墳調査会 1992『野毛大坂古墳—第4~6次調査概報』
フ 福井市教育委員会 1993『剣大谷1号墳発掘調査報告書』
ヤ 安田良栄 1977『郷七のあけぼの』『立山町史』上巻
リ 立命館大学文学部学芸員課程 1987『立命館大学文学部学芸員課程研究報告第1冊—鴨谷東1号墳第1次発掘調査概報』
立命館大学文学部学芸員課程 1989『立命館大学文学部学芸員課程研究報告第2冊—鴨谷東1号墳第2次発掘調査概報』







図版3 稚兒塚古墳航空写真（富山県公文書館提供）



図版 4 第1区完振全景（西側周濠内から）



1



2

図版 5 石垣状遺構 1. 石段 2. 石段撤去後



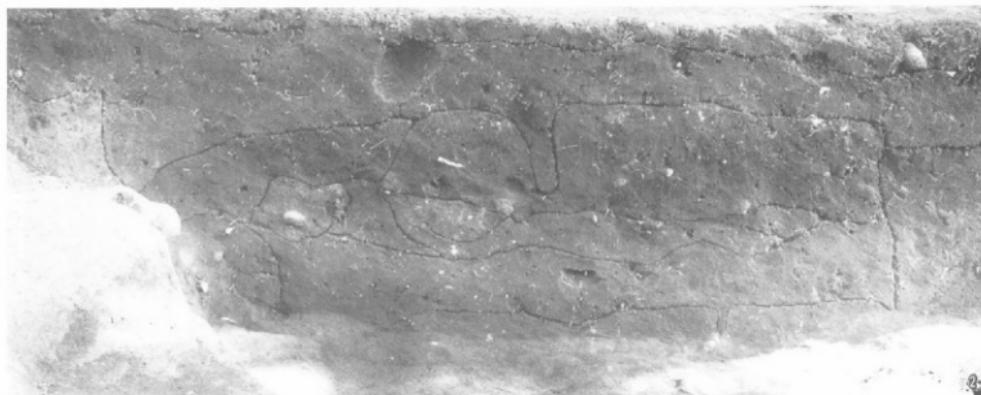
図版 6 第2区完掘全景(南から)



図版 7 第2区埴丘斜面全景（南から）



図版 8 テラス部・2段目斜面近景（南から）



図版 9 1. 中世墓全景（南東から） 2. 中世墓（西から） 3. 土器皿出土状況（西から） 4. 調査風景



図版10 1. 第3区 1段目斜面近景（南東から） 2. 弥生溝（東から）



図版11 1. 第4区周庭帯完掘全景（西から） 2. 周庭帯（東から）



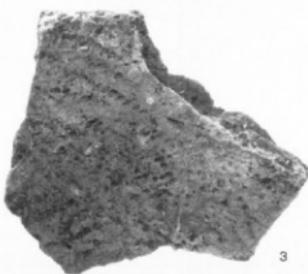
図版12 調査風景



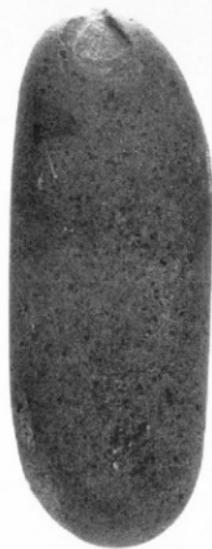
1



2



3

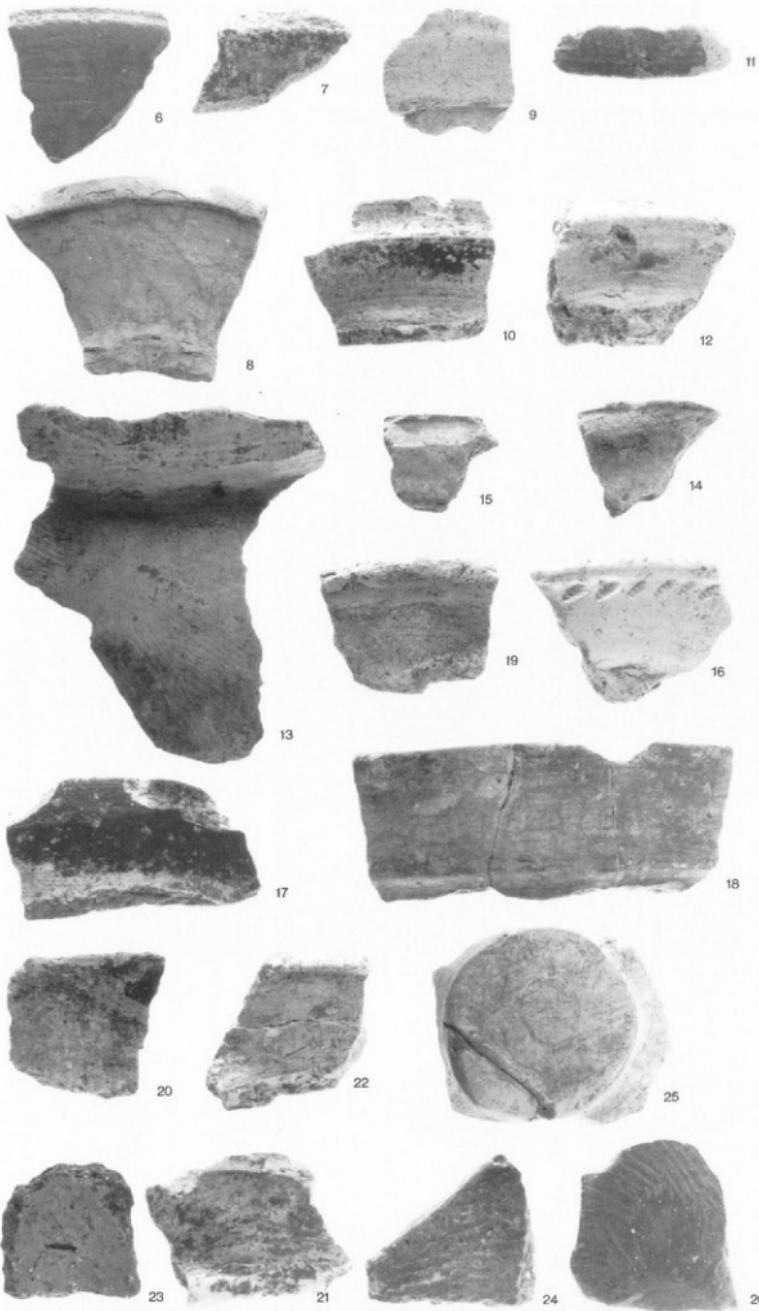


4

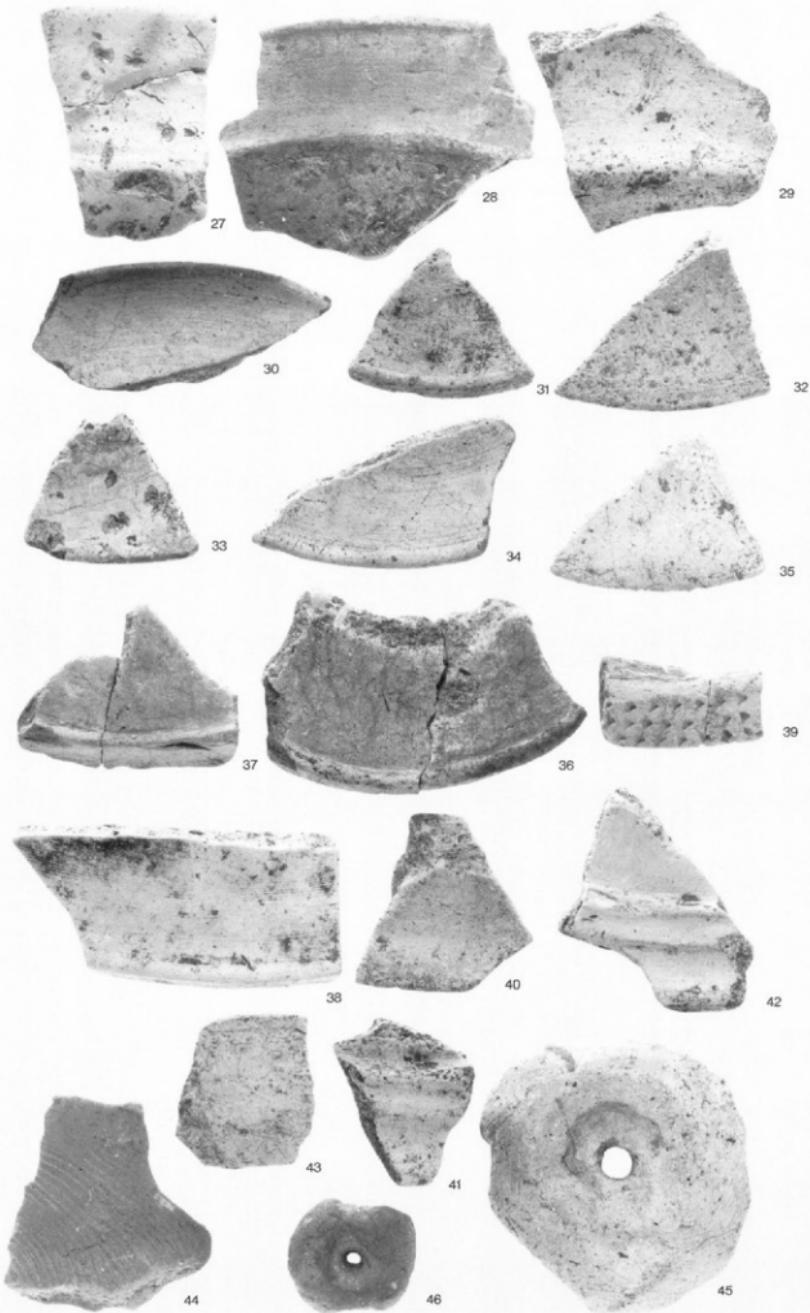


5

図版13 遺物写真



図版14 遺物写真



図版15 遺物写真



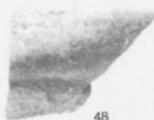
1

2

57



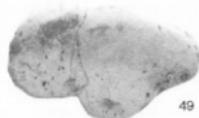
47



48



66



49



50



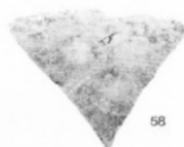
51



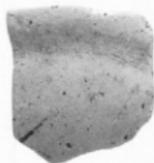
52



53



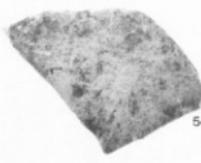
58



55



56



54



60



62

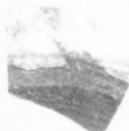


59

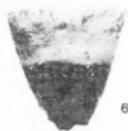
図版17 遺物写真



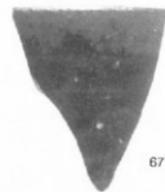
63



64



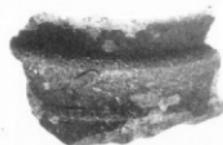
65



67



68



69



70



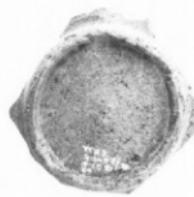
71



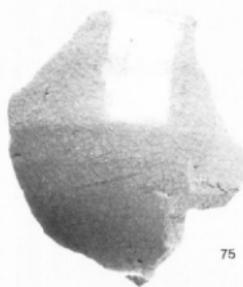
72



73



74



75



76



77

稚兒塚古墳
—第2次発掘調査報告—

立山町文化財調査報告書第21冊

発行日 平成7年3月31日
編集 立山町教育委員会
発行 立山町教育委員会
印刷 ヨシダ印刷株式会社

